

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	アメリカ経済史学の断面
Author(s)	花田, 久
Citation	歴研月報(21): 11-12
Issue Date	1953-09-25
URL	http://hdl.handle.net/10109/8646
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

アメリカ経済史学の

断面

花田 久

「愛国心」というものは利用され易いものである。支配階級は愛国心に訴えることによつて自己の支配を容易にすることができざるからである。特に戦時においては時の権力者に忠誠を誓ふことが利口の學者のとるべき道らしい。これは愛国心に通じ、とにかく彼らの地位は保証され出世の機会に恵まれるからである。しかしこれには義務が伴う。この事は戦時中のわが国をみれば一目瞭然である。最近のアメリカにもこの現象が現われ、この種の學者には「新しい」歴史の創造、つまりアメリカ史の書き替えが要求されているようである。そして「ハーマンは経済史学会におけるこのよう活動きを伝えている。(経済評論七月号) 彼によると、アメリカの愛国の歴史家は、

「いままでの歴史家が女性的理想主義に陥つており、現在の巨大な経済的メカニズムを良くないもの、株に思っているが、それは不当な評価で、この機構こそがアメリカに幸福を

瀟々としたのであつて、その建設者たる「わが物産的發展の英雄たち」がいなくなつたならば今頃は敗戦国になつていた、ろう。われわれはこれらの英雄たちを好意的に見るべきである。と主張している。これは本ウエスツの主張である。更に、ロビンソンによつて資本主義の矛盾を「暴露」することは「人間性にとつて有害無用」國民にとつてきつめて危険なもの」といふことをつけ加えられた。確かにこの「暴露家」の示してくれたものは極めて禽慾な、愛国心を無視してまご利潤を追求した資本家の「死の商人」振りであつた。しかしそれは正確な歴史に曇るものであつたのである。「暴露家」たちの特別の発見は大部分正確で、彼らがげんにおこはわれている実業界の多くの悪習を暴露した」(傍点以下、ハーマン) ことはウエスツも認めるところか、彼は「新しいアメリカ史を主張する。ハッセルも二の一人である。ウエスツは云う「歴史家たち泥棒貴族(独逸的企業家の二ト一重名)に對して下したきびしい批判のなかには、いくらかの的確はあつたが、その告発は一面的だつた。彼らは又点ばかりに固執して長所を見すこした、正しい歴史的正義の要求にか

つた公正な姿をあたえられるは、泥棒貴族はまことに大胆な冒險家であつて、彼らがアメリカ建設にさいしてはしどげた物産的生產力の創造は、暴露家たちが彼らの貴に帰した罪難よりもはるかに大きい。こうした尤にてらして歴史をかきかえることが歴史家の責任なのだ」。こ、われわれは「新しい歴史の核心をみる」ことができる。では何故「新しい歴史」が要求されるのか。それは不満が増大して社会革命にほろろとする動きをそつし、反抗をまひさせ、泥棒貴族の行爲を神聖化しようとし、資本主義制度を美化するためなのであるから、と「ハーマンは理由をつけている。現在様は熟している。實質的には戦争期に入つていくからである。まさに「新しい」歴史が作られようとしている。「マンモンには王冠を授けなければならぬ」とアイロニイを以つて彼はその小文をこじている。

「ハーマンは労働者出身の経済史家でスウェーデンと共にマンズリッシュヴェーアの編集者で社会主義者。彼の『新しい歴史』はマンモンへの加冠」と題する一文のみでは、これがアメリカ経済史学の動向(という副題のあるにもか、わらず)とあると考へる

ことは断断に過ぎはしないだろうか。彼のあつた學者が学会などのような位置を占めていたのか私には分らない。また所謂、主流的學者にふれていないこともこの不安を増すように感ずる。しかしながら、ともかくこのように動意は、或る社会主義經濟史家の目に映じた一断面と考へるよりは差支えあるまい。

譯のロビンソン教授

(2) スタンフォード大学アメリカ史研究員

(3) *New School for Social Research* 職員

著者

School of General Studies of Columbia Univ. 校長

著者

(一九五三・九・一)

追記、「厂史学研究」の最近号(一六四号)に「最近のアメリカ史学」について豊川良一氏がその現況を伝えているが、それによつて不ウインズ・ロビンソン、ハカー等が現役として活躍している學者であることを知つた。ローバーマンの伝えるような、傾向をそこにははつきり認めることはできなかつたが、一九五二年夏季大会においては「全体として政府関係ないし軍関係の報告者が多く、また、南北戦争以後の国内の問題について、その内

容的が諸問題についてこの討論報告が會場であつたといふことであるから、この事も考へたによつては新しい歴史創造への動きを裏付けるものになるかも知れない(十二三)

(文・文・三年)

読書ノート

E.H.ローマン

『日本に於ける近代國家の成立』

「厂史は疲倦なき教師である」斯く著者E.H.ローマン氏をしていむる程、今日の我

國をける明治維新史の研究著作は、將に半中元極の感嘆を符ない。その中に伍して、しかも外國人であると言ふ不利な極端を免事克版し、日本近代史の研究に新生面をうち開いた画期的な著作として、「日本における近代國家の成立」は、西歐學者の研究だけに、その特異はニエアンスは固際的にも極めて高く評価される。只に、現代日本の研究に志向するものにとつて、此書の著と云うべきである。著者E.H.ローマン氏は一九〇九年、長野県も整井沢に産声をあげ、カナダ台同教念欲道としての宣教師を父とし、現関西学院入英文

學教授であるハワード・ローマン氏が彼の異兄とあつてみれば、彼の日本史研究への志向は満更無慮のしからしむる所以では無い。十五ヶ丘神戸のカナダ学院に學び、その後平岡のトレント大学に進み、卒業ケンブリッジ大学に留學、厂史學特に英國中世社会史を専攻した。一九三八年、研究史料及び日本の著者の意見を参考にする為訪日。その後外務省に入り、東京のカナダ公使館に勤務、傍ら日本近代史の研究を継続。

著書としては、本書の外に

Soldier and Peasant in Japan:

The Origin (emancipation, New York, 1943)

「日本に於ける兵士と農民」陸井三郎訳一九四七年刊、これは附録として、玄洋社の研究「日本帝國主義の一潮流」を納めて

いる。「忘れられた思想家」安藤昌徳の二

(岩波新書上下二卷)一九五〇年刊、大室源

二訳

尚、未公刊の原稿として、*Feudal Back-*

ground of Japanese Politics 1945

がある。

本書は、十数年前の刊行であるだけに、又

外國の學者として一応整理なからぬ事なかつ